
君はアイドル

レオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君はアイドル

【Zコード】

Z8327Y

【作者名】

レオ

【あらすじ】

星に誘われて、今、話題沸騰中のベルガク工房のコンサートに行くことになった癒菜。

コンサート会場はうるさくて、外に出た癒菜。
そこで、ある人に会つて・・・?!

* 第1話 * (前書き)

連載2作目です

更新速度、遅くなつたらすいません(汗)

第1話、ご覧くださいませ

登場人物

・ 東堂癒菜 とうどうゆな

・ 高2、クールな性格

・ 超がつく美少女。女優セシルの娘。

・ 星空季唯 せいくうきい

・ 高2、元気満タン。毎日ツインテールの

可愛い子。ベルガク工房とオシャレが大好き

・ ベルガク工房のメンバー(計5人、全員高2)

・ 折原零 おりはられい

・ リーダー、俺様、ボーカル担

・ 白田皇 しらたごう

・ 副リーダー、草食、ボーカル担、ギター担

・ 仲居翔 なかいしょう

・ メンバー、ムードメーカー、ドラム担

・ 新井真 あらいしん

・ メンバー、子供っぽい、ギター

・ 井坂雷 いさかくろい

・ メンバー、ドS、キーボード担

* 第1話 *

「癒菜～ツツツ」

読書しているあたしに走つて近付いてきたのはツインテールの可愛い女の子。

名前は星空季唯、高校2年生の元気満タンの子。ちなみに、あたしは東堂癒菜、高校2年生のよく

「クールね」って言われるような性格らしい。

「星、ドジして抜けたりしたら、危ないよ」

「大丈夫～！つたあ！？」うわあつ！！！」

ドスツと鈍い音がして、次には「いたあつ」って言つ星の声が聞こえた。

多分・・・いや。絶対にものすごく痛いと、思つただけど

「予告したにも関わらず何やつてんの・・・。」

「いやあ、『じめん』じめん～」とまあ、確実に次は氣をつけようとか言つ

注意書きは星の頭に無いみたいだね・・・（苦笑）

「あ～でさでさつ～癒菜、明日用事とかないー？」

「別にな～よ」

「あのね～明日、ベルガクト工房のコンサートだあるの～でね！」

そのコンサートに、わたし、あたしちゃつたんだあ～！」

「そ～なんだ、よかつたね？」

別に特に興味をもつていらない私からすれば

どれだけ親友でも正直どうでもよかつたりする。

「本当によかつたあつ～あ、それでね～そのコンサートのチケット2枚あるから

もう一枚癒菜にあげるからついてきてほしいの～」

「は・・・？なんであたしまで・・・」

「いやあ・・・ほら、私すぐ迷子になつてなにがなんだかさっぱり

になつちゅつて・・・

「はあ・・・・。ほんと、世話の焼ける子ね？ま、いいよ、ついてつてあげる」

「やつたあつつ！癒菜つて本当いい人！最高！・ダイスキッ」

そういうつてガバッと抱きついてきた

黒いツインテールがあたしの首に当つてくすぐつたい

「星、くすぐつたあい・・・。つか、くるしい」

首にがつしり手を絡ませてるもんだから、苦しくて仕方ない

「へへえんつ掛かつたなあ～！」

「わ、わあつかつた！何をおのぞー・・・う・・・・

あたし、撃沈。

苦しそぎ・・・。

「あれ、癒菜がしんじゅつたー（笑）」

「んもー・・・馬鹿星・・・星へ帰れー！」

こんな感じで、あたしは明日、ベルガクト房のコンサートに行く事になつた。

* 第2話 * (前書き)

第2話「」 覧くださいます

* 第2話 *

「癒菜、『めえーん！まつたあー？』

「大丈夫、あたしも来たところだよ。」

「そつかあ！じゃ、よかつた！…さてと…」

今日は星に誘われてベルガク工房のコンサートに行くんだけど正直、興味ないあたしは多分詰まんない顔だと思う…まあ…星は素でぼけてるから気付いてないけどね

「ね！癒菜！今日の服どう思つ？」

「ん？ 可愛いと思つよ？ 星っぽく、キュートだし」

「やつぱり？ よかつたあー！ わざわざ買つた意味アリアリアだあー」

「口一口しながら首をブンブンとなぜかふりながら嬉しそうにしゃべる星。

まあ…星の言つのがあるから、憎めない…なんだよてか、隣にいるからそのツインテールがあつて痛いんだけど…

「星、痛い」

「え？ あははつ…『めんー！ てかわ、癒菜の服

クールで大人でいいなあー』

あたしの服を見て、うきやきやと喜ぶ星。

これのどこをみていいなあと言つたのかさつぱりだ。

黒縁のダテめがねに制服のカッターシャツに縞模様のネクタイ黒いスキージーンズにハイヒール、髪の毛は下ろしました。すこくすこくすこーく、普通なんだけど…

「しかもー！ セクシイッ」

星が目ハートにしながら、あたしの胸元を見た。

いつもの癖で、カッターシャツのボタンを4個ずつまで留めていなかつた。

まあ、下着が見えるわけでもないけどさ

「これ、セクシイなの？」と言つか、ついたけど……」

星がえ！？といわんばかりに振り向くと

案の定、人にぶつかるわけ……でね

「「、「ごめんなさい！」

「んもー、気をつけてねー？」

優しそうなおねえさんだ。

ファッショーンは星と似てるかな？

「おねえさん！その服、どこで買ったんですか！？」

「え・・・？これ、手作りよ？」

「そりなんですか！？すこいすこーい！その作り方おしえてくださあいー！」

おいおい……！」で言つか……

そんなもの断られるに決まって……

「いいわよー！あなた、座席どこかしら？」

「アリーナ席の……です」

「あらあー！私とお隣ね！ラッキーだわー、あなたみたいな子が横で

～！

さー！いきましょうか！

「はい！癒菜、いこー！」

・・・・。

何故こうなったのかあたしには不明すぎる……。

星の人見知りしなさすぎる性格には「あ」もいえない……

会場に入ると、ざわざわ、がやがや、つるわこつたら……

あたしは「うるさい」ところが結構苦手……。

席に着くと、星と比奈さん（さつきのおねえさん）はすでに服のはなしとベルガク工房の話で大盛り上がりだ

「「めん、星、あたし外のカフェにいるね？」

「コンサート始まつてもこないかもしぬないけど、放つておいていい

から

「うん～わかつた～！あ～それでね
なんて薄情な子だ・・・
まあ、いいんだけどねえ

外に出ると、もうほとんど人はいなくて
カフエなんて誰もいなかつた。

「いらっしゃいませ、ご注文お決まりですか？」

「コーヒーのブラックで」

「かしこまりました」

やつぱりベルガク工房って人気あるね

えつとー・・・

メンバーおっはられいは折原零しおたにりと白田皇ながいしょうと仲居翔なかいしょうと

新井真あらいしんと井坂雷いさからいだつたつけな？

で・・・星がすきなのが仲居翔君なかいしょうくんだつけ。

そういうえば皆、高2なんだよね

なんか、高2でアイドルって多分、てか絶対すごい

こんな事を考えて、多分15分ぐらいたつた頃だつた

「君、コンサート会場に入らないの？」

不意に後ろで声が聞こえて振り返つた

「中はうるさくって、外に出ててるんです」

帽子を深く被つたその子は、男性なのにきれいな肌で

長身で、顔はアンマリ見えないけど、世間で言うイケメンと書つも
のだと思つ

「え、じゃあコンサート来てる意味つて・・？」

「ああ・・・、友だちが素ボケちゃんで、ドジだから

付き添いみたいなので来たんです。正直、あたしはベルガク工房に
興味無いんで・・・（苦笑）まあ、大体のことは知つてますけど・・
・つて

なんか、すいません。（汗）」「

やば……長くしゃべりすぎた……。

「やついう事ね……? つて……これ零に知られたら、君えらい田にあうね……」

「零つてベルガク工房のリーダーですか？」

「うん、そうだよ。あ……てか、君僕の事誰かわかつて……ないよね？」

「ええ、まったく。まず顔、見えてませんし。」

「やつぱりね……ま、ファンとかじやなさそうだから、バラしてもいいかな。」

そういうと、その男性は帽子をひょいと取り、机に置いた

「……白田皇……？」

そのキレイな肌の男性は明らかにベルガク工房の副リーダー、白田皇だった。

「驚かないね？」

「え……ええ、まあ、ちょっと動搖しますけど……」

てか、なんでいるんですか？ 後5分とかではじまるんじや……？

「なんか今、トラ、ぶつてるみたいでね……僕、そういうの苦手

でさ」

「そりなんですか……なんか、テレビとは違いますね、やつぱつ」

「え？ そのやつぱりの意味はなに……？」

「ほり、テレビじやどがつくSですね？ ケド、今、SでもなければMでもない

極普通の男の子って感じで。まあ、テレビ見てたら大抵分かりますけどね？」

「ま……キャラ作ってるからね……？ 僕結構が弱いよ」

「男でもか弱いのは仕方ない事ですよ。と言つか、ソロソロいつたほうがいいんじゃ？」

もう20分はたつてるかと？」

あたしとしゃべってる間に実は時間は大いに過ぎていた

大丈夫なのか、あたしにはまったく不明で・・・

「そうだね、もう行こうかな。ああ、ついでに、君も一緒に来て?..」

「は・・・? なんであたしまで?..」

さすがにこの発言にはびっくりだ。

いきなり来いとか・・・つか、ついでってなに?..

「マネージャーにぴつたしかと」

「はあ?..」

「アイドルにはあはないでしょ?..」

なんか、皇君テレビキャラに戻つたし!..

「あたし、一般客ですよ?..てか、そっちのほうの資格とか・・・」

「大丈夫、資格なんて僕たちでごまかすし。んじゃあ、行くぞ」

やばあ。こいつまじでSだろ!..

「ちょ、まつ・・・。もう・・・。」

あたしは諦めて、拒絶していた状態をやめて
渋々ついていく事した。

* 第3話 * (前書き)

第3話「」 覧くださじませ

カフフであつて、なぜかマネージャーに任命されてつれてこられたといはば、樂屋・・・らしげ。

「ここが俺の樂屋。入つて、ちょっとまつてて。」

「ああ・・・はい」

樂屋全員別々なのが・・・。

恐るべし、ベルガク工房

部屋に入ると、何かすつゝい普通の部屋なわけで・・・ベットあるし、シャワー室あるし、キッチンまでも・・・ああ・・・そうか、ベルガク工房は一定の場所でしかコンサートしないんだっけ？

あたしは入つてすぐのどこのドアに寄りかかってまた、本を読み出した。

タツタツタツタツタ・・・・・!

ばんつ！

ドアが勢いよく開いたかと思つと

皇君が息を切らして、あたしに叫んだ
「ごめん！なんか、トラブル酷いらしくて！解決したらすぐ始めるから

後・・・3時間、ぐらい待つてもうれる？！

「ああ・・・ハイ。」

「コレ、渡しとくからー。コンサート見たかったらコレ、スタッフに見せて？

誰か聞かれても、コレ見せて名前書つてねーそれじゃー。
ばしんつ！

今度は勢いよく閉まる。

・・・嵐だ・・・。

てか、別にこんなのは無くてもいいのんだけどね・・・。

あたしは仕方なく、皇君の部屋にあるソファーに座つて本を読み始めた。3時間か・・・5冊で走りだらつか・・・(1冊30分)

10分ぐらいいたつたときだつた。

外から「みんなーつ！待たせたねーっつーーー」と言ひ声が聞こえた。

えーっと・・・始まつたのか？？

で、多分・・・この声はリーダーの零かさすが、声通るね

声もキレイだし

歌手つて感じするねー。

1時間ぐらいいたつた頃だらうか。

廊下から声がした

『翔、どこへいったんだああつ』

この声、零君？

『なに？お前そんなに零が気になんの？』

『え、ああ、まあ・・・』

『零のくせして、きもちわりい』

『おま！てめえの部屋も見んぞー』

あたしの予想だと、これはコンサートでよくある劇みたいなものかな。

声、大分通つてゐみたいだし

会場と映像でつながつてんだろうな

あ・・・てか、今の状況だと

あと少しでココにくるわけだよね・・・？

つて、どうすんの！！！

・・・「」は、あたしの才能で切る抜けてやろうぢやない・・！

あたしは、本を閉じ、カバンに入れて、カバンからめがねを取り出しあけ

ネクタイをきつちり締める。

「よーし。」

ドアを開けて、外にでる。

1mぐらい先に零君と皇君がいた。

皇君は目を見開いて、「なんで出てきんの？！」みたいな顔をしている。

・・・あたしの才能讃めないでいただきたいものだ

あたしはスタスターと歩いていき、カメラをよけて通りすぎた。

「おい！お前！誰だよ？！」

零君が声をかけた。

そりやそうだ、知らないでしょうよ

「おはようございます、こちらのスタッフの東堂癒菜です。」

頭を下げてそこをさつた。

これこそ、あたしの才能、「演劇」だ。

即興でやれといわれてもできるぐらいたにはある。

なぜかつて？まあ・・・一応親は今人気の女優、芸名セシナ
本名東堂春千佳だからねえ・・・。

舞台裏まで行くと、スタッフさんがこっちをみてぎょっとする。

これまあ、当たり前だと思う。なにしろ、知らない人だし。

「ちょ、君！部外者は・・・！」

「セシルの娘です。」

「セシル・・・？つて、え！？あの女優の？！」

「ええ。」

「す、すこませんー、びつひ、こひらひー、」

「いえ、結構です。そこの近くで見せてもらいます。」

ほらね、皇廟に渡されたものなんて必要なし。

まあ・・・あんま親の名つて使いたくないんだけどね。

近くで見るものの、思ひ事は同じでね・・・

「やつぱり・・・つるさこ・・・」

はあ・・・樂屋に戻りたい・・・。

でも戻れる状況じゃないし・・・

皇君やらがココに戻つてきたら、それくわと戻つてやる・・・

* 第4話* (前書き)

第4話「」 覧くださじませ

* 第4話 *

10分ぐらいして、やっと皇君達は舞台裏のほうに戻ってきた。
もちろん、翔君を連れて。
カメラも回った状態だ

零君がこっちを見て、怪訝な顔をしたけど
あたしはニッコリ微笑んでペコリと頭を下げる。

翔君もこっちを見て目を見開いた。これもまあ、何でいるの?的な
奴ね・・・。

ま、今はスタッフ兼セシルの娘=大物の子供=大事な存在、だけどさ

皇君たちが舞台に戻つて、あたしも楽屋に戻ろうとした。
が・・・そのとき、舞台から予想外に声が聞こえた
『翔も見つかった事だし!暇だから、美少女さがしでもしない?
会場の皆さんの中で!!--』

零君だ。

会場は『きやあああああ!!--と嵐のような声が聞こえた
まあ、ここまでは別に何と思わなかつた

『俺かわいい子しつてんでえつ!今、つれてくる!!--』

そういうと舞台裏にピヨンピヨンと来て

あたしの前までくると『来て!』と、ニコニコしながら言われた。
・・・は・・・?
何であたしなんだ・・・?

意味わかんないけど!?!?!

「な、なんであった・・・私なんでしょ?/??/?

「かわいいから!ほら!はやく!」

そういうつてから耳元で「君、セシルさんの娘さん、だろ?」と囁いた。

・・・・なに、それ。

まあいい、ここも演じるしか方法はない。

あたしはネクタイを緩め、ボタンも4つ目まではずした
舞台に行くとまあ、そこには「なんでおまえー?」って言ひ零君と
「戻つてなかつたのか?！」って言ひ皇君が・・・ね
まあ、翔君はそんな事もお構いなしで
「セクシーで可愛い子でしょ！」

と、零君と会場に笑いかける。

会場はシー・・・ンとしている。

や、やばい・・・ここはもう、あたしの出る幕じゃないわ・・・。
「あたし、時間がないの。だから、こいら辺でおさらばします
ごめんなさいね、それではシイコウアゲイン」
そういうて、さつ際に皇君に「「ごめんなさい」とつておいた。

舞台裏に戻ると、あたしはスタッフの田にもくれず
カバンを取つて、めがねをはずし、楽屋に戻つた。

「はあ・・・。もう、口にはいちゃいけないかな（笑）」「
楽屋に戻つて、最初に咳いた言葉だつた。

なんとなくだけさ、いたら、いろんな人を困らせてしまって
んだ

あたしはメモ帳に『いろいろ事をして「ごめんなさい』
マネージャーの件はお断りします。ありがとうございました。 by
癒菜』

と、書いた。

「名前・・・知らないけど、まあ、いいかな」

あたしは、楽屋を出てさつきいたカフェとは反対側にあるカフェへ
行つた。

そして、また、本を読む。

自分でも思つた、なんて波乱万丈な展開なんだ・・・と。正直言つて、あたしはいつもこんな感じだ。

こんな感じで、最終的には人を困らせてしまつ、最悪なんだ・・・。

本を2冊、読み終えた頃だつた。

リロリンクロリンク

メールが来た。

「星ちゃん」

メールを開くと、メールは、まあ星らしくいつもそな内容なわけですね・・・

件名：じつめーん！

本文：じつめーん！あのね！おねえさんと話盛り上がりちゃつてた。コンサート終つたら、食事行こうって誘われちゃつた！だから、先に帰つてもいいでーすつーじめんね～

季唯

・・・

結局そうなのね？

てか！来た意味ないじゃないか！――

・・・はあ・・・無意味すぎ・・・せいつあく・・・。

「お客様、じつ注文・・・は・・・」

不意に店員さんの声が聞こえてあたしはケータイを落としちゃうになる。

「わわっ！す、すみません（汗）えっと、ブラックホールで！」

「かしこまりました、お客様、なにかお悩みで？」

「え・・・あ、いやあ・・・（笑）友だちの素ボケつぱりに絶句してて・・・」

「そうですかあ（笑）でも、かわいらしいお友達みたいですね？」

「え？ええ、まあ・・・」

「そのストラップ、見たらなんとなくわかります」

店員さんがさしたのは、星とおそろいにした、クマが星を持つてる

ストラップだった

「店員さん、エスパーみたいですね？」

「そうですか？見たら、わかりますよ？」「一ヒー、お持ちいたします」

す

そうじつて店員さんは奥に引いていった。

気さくな店員さんだなあ・・・と思いつながら、また、本を読む。

「一ヒーお持ちいたしました。」ゆっくり

店員さんはにこっと笑つてまた奥へ引いていった。

ケータイを見て、あたしはびっくりした。

なにしろ、もう3時間ちよいはたつていたからだ。

「はやいなあ・・・」

そう呟いたときだった。

「なにが早いのかなあ？女優セシルの娘の東堂癒菜さん？」

後ろから声がした。

今度はまったく動搖もなかつた。

・・・また、皇君の声だった。

「・・・セシルの娘ですが、なにか？」

あたしなりに答える

「マネージャーの件断るとか、できると思つてるのかな？」

「ええ、まあ。あたしの意思ですし」

「コンサートに乱入したくせに？」

「あれは翔君が悪いんですよ。」

「ま・・・なんでもいいけど、断る権利とか一切ないから

・・・なんであたしなんですか

「美人だから。」

「はあ？！それだけですかあ？！」

「んまあ・・・後は・・・秘密」

「はつ・・・とにかくお断り・・・」

「俺がお前を任命してやるよ」

あたしの言葉は、遠くから、だけ良くな通る声で遮られた。

・・・零君だつた

近くまで来ると、零君はニヤリと不適に笑い、あたしに告げた。

「お前、俺らの事興味ないんだつてな?なら、お前が俺らの事が好き・・・いや

正確には俺の事が好きつていつまで、絶対話してやらねえ」

・・・・・・

意味がわからない。

興味ないけど、なぜあたしが零君のことを好きにならないといけないんだ?!

「ちょ、ちょつとまつて? ! 意味わからんないつて!」

「だーから、俺の事すきになるまで、まねやらせるつてわけだよ。こんな美人が俺に興味ないとか、まじ許せないし?」

「・・・・色々おかしいし間違つてるけど訂正しなくていいんだね?」

「ああ、別に間違つてない」

「ちょっとまつて、一つ訂正させて。あたし、美人じやないし。」

「そこは一番訂正しなくていいところだし。まーとりえず、こい」

無理矢理腕を捕まれて、また樂屋のほうに連れて行かれる。

「まつてつて! あたしが行つてもいいこと起こらなーいし!」

「いいから、こい。否定権ないから」

零君つてむつちや俺様!?

もうつづ!

無理矢理すぎなんだし! ! !

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8327y/>

君はアイドル

2011年11月26日20時47分発行